

主を賛美するために民は創造された

女子短期大学子ども学科教授
飯靖子
II Sakiko



ところを一つに 平和を求め、
主を愛する愛 明るく燃やそう。
主はぶどうの幹、われらその枝。
主はわれらのもの、われら主のもの。

恵みの子たちよ、交わり深め、
愛とまことを 互いに誓おう。
われらのきずなが 弱まる時も、
強めてください、主の愛により。

主はわれらのため 苦しみを受け、
その友のために 命を捨てた。
われらも互いに まことの愛を
兄弟姉妹と 共に分け合おう。

どん広がりしました。オルガンは指を鍵盤から離さない限り、音が減衰することなく鳴り続けます。オルガンで弾くバッハは、ピアノでは聞こえなかった響きの世界が広がり、バッハとの新しい出会いをしたような気がしたものでした。また両足を使って弾くペダルの低音は、指で弾く旋律を支えてくれます。ピアノとは違う魅力がオルガンには溢れていました。しかし、オルガンを学び続けるうちにバッハが一番心と力を傾けたことは、礼拝での音楽であることに気づきました。

「後の世代のために このことは書き記されねばならない。『主を賛美するために民は創造された』」（詩編102編19節）

キリスト教の歴史は賛美歌と共にありました。聖書にも折々に祈りと賛美がささげられてきたことが記されています。三一三年、ローマに拠点がおかれたキリスト教はラテン語で神への賛美を始めます。特別に訓練をされた修道士によつて賛美はささげられました。ミサではギリシャ語で聖書が読まれていました。一五十七年の宗教改革まで続きます。

宗教改革はドイツ人カトリックの修道士マルティン・ルターが起こしたキリスト教の改革で、これによりたくさんの変化がありました。その中で私が一番注目したいことはルターによる聖書のドイツ語への翻訳、ドイツ語で歌える新し

分かれた民が 一つにされる
その日が来るのを われらは望もう。
主の光を受け その輝きを
世界に示そう、主の弟子として。

この讚美歌「ところを一つに」は一九九七年に出版された『讚美歌21』の393番として「神の民としての教会」の項目に収められています。歌詞はヘルンフート兄弟団の設立者ニコラウス・ルートヴィヒ・フォン・ツインツェンドルフによつて作詞されました。ヘルンフート兄弟団はドイツにおける最初の自由教会として、世界伝道、教会一致運動、そしてもうひとつ、熱心な賛美礼拝をすることでキリスト教史に大きな足跡を残しました。私が所属する教会ではこ

い賛美歌「コラール」を多数生み出したことです。人々は礼拝をわかる言葉、ドイツ語で守れるようになったのです。それまで歌われていたラテン語のグレゴリオ聖歌に代わり、コラールが歌われるようになりました。グレゴリオ聖歌はその後西洋音楽の源泉として音楽の発展に貢献してきましたが、宗教改革によつて歌い始められたコラールの中にも形を変えながら歌い継がれていきました。また、ルターらは多くの人たちが歌えるように工夫を凝らしながら、新しい賛美歌をたくさん生み出しました。私たちが今でも受難のコラールとしてしばしば歌う「血しおしたる主のみかしら」は、元はハスラー作曲の「わが心の切なる願い」という、当時ドイツで大流行した恋愛歌でした。誰もが知っている旋律に聖書の言葉をつけることによつて、更に多くの人々が神様を賛美することができるようになりました。この新しいキリスト教の礼拝を守ったドイツの人々の心躍る様子が目に浮かぶようです。

コラールが生まれたことによつてその後の作曲家たちはコラールを素材とした礼拝のための曲を作り始めます。前述のバッハもその一人です。バッハは生涯最後の二十七年間、ライプツィヒの聖トーマス教会のカントーラ（音楽監督）として毎週の礼拝のための音楽を作りました。その日読まれる聖書の箇所を音楽で豊かに色づ

の讚美歌を毎年八月一週目の「平和聖日」で聖歌隊が歌います。キリストによつて結ばれている私たちが心をひとつにして平和を求め、世界中の民がひとつにされる日を望もう、と歌います。ツインツェンドルフが歌詞に込めた思いを礼拝に來られた方々にも共有していただけたらうに、言葉を大切に歌います。

私はクリスチャンの母に育てられ、幼い頃から賛美歌を歌ってきました。私と音楽との出会いは賛美歌だったとも言えます。ピアノを学ぶ音楽高校へ進み、その頃から近くの教会で礼拝の奏楽をするようになりました。十七歳の時に受洗、大学卒業後にパイプオルガンを始めました。よい師に恵まれ、オルガンへの興味はどんなに及びます。またコラールを題材にしたたくさんオルガン曲もあります。コラールにつけられた言葉（歌詞）が音の並びや形や組み合わせによつて音楽の中に見事に表現され、まるで楽譜から言葉が読み取れるかのようです。それらの作品に触れるたびにバッハが聖書をいかに深く理解していたかを感じます。コラールが生まれたことによつてキリスト教はますます賛美が豊かになりました。

私は今、所属している教会でオルガニストと聖歌隊指揮者を務めています。聖歌隊は毎週の礼拝の中で奉唱をします。教会暦やその日読まれる聖書や語られるメッセージから奉唱曲を決めます。八十年以上奉唱されている九十四歳のお年寄りから二十代の方々、約三十数人の聖歌隊員がいつも心に留めていることがあります。『歌詞が会衆の心に届くように歌うこと』、『音楽は言葉をより豊かにするための手段であるから、より音楽的に歌うこと』です。私がキリスト教音楽に関わつて五十年以上たちました。キリスト教を礎として発展してきた西洋音楽をこれからも続けていく中で、賛美をするために私たちが創造して下さった神様にいつも感謝し、心から賛美をする者でありたいと願っています。